銀賞

保全の視野、地球の未来

愛三工業株式会社　安城工場
宮本　龍弥

私は設備保全係に配属されてから6年目を迎える。これまで設備の作業効率向上や、現場負荷軽減を目的とした改善を数々行ってきた。
そんな私が「カーボンニュートラル」という言葉を自分事として捉えるようになったのは、5年目を迎えた時に受けたある依頼がきっかけだった。
内容はダイカストマシンと付帯設備であるミストコレクターを連動させ、設備が止まっている間は不要な運転を止めるというものだ。当時の私は、この改善内容を深く考えず、ただ「決められた期日までに作業を完遂させなければ」としか思っていなかった。しかし、依頼元の担当者との会話が、私の意識を変えた。「設備が止まっている間に動かすのはもったいないよね。電気も、エアーも、すべて無駄なエネルギーなんだ。」
その言葉を聞き、私はハッとした。これまで、壊れずに動かすことばかりに目を向け、稼働の裏側で消費されているエネルギーの重みを、本当の意味で理解していなかったことに気づいたからだ。「カーボンニュートラルとは、単なるスローガンではなく、こうした目の前の『エネルギーロス』を徹底的にそぎ落とすことなのではないか？」と考えた。
気になって自分なりに詳しく調べてみると、カーボンニュートラルとは、二酸化炭素の排出を抑え、地球環境を守る世界共通の取り組みであることが分かった。だが、ここで一つの疑問が浮かんだ。工場で使う「電気」そのものは、目に見える煙も二酸化炭素も出さない。それなのに、なぜ節電が脱炭素に繋がるのだろうか。
その答えは、電気の大元にあった。私たちが何気なく使っている電気を作る過程を辿っていくと、発電所に行き着く。そこでは今も化石燃料が使われており、発電のたびに二酸化炭素が排出されているのだ。電気をムダに使わないことは、発電量の抑制に直結する。この「電気の裏側」にある繋がりを理解したとき、自分の作業が地球の未来につながっていることを改めて実感し、背筋が伸びる思いがした。
改善を終え、思い描いた通りに設備が動いた瞬間、大きな達成感が込み上げた。

さらに後日、算出した二酸化炭素の削減量を目にして驚いた。自分の手掛けた連動化が、数字で見るとこれほど大きな環境への貢献になるのかと。設備保全という仕事が、会社だけでなく、地球環境をも支えているのだと、心から誇りを感じることが出来た。
今回の改善は、私自身が見つけたアイデアではなかった。しかし、この経験を通じて私の設備を見る「目」と「耳」は明らかに変わった。以前の私にとって、工場の喧騒はただの「作業音」に過ぎなかった。しかし今は、現場を歩きながらふと耳を澄ますと、不要な設備の稼働音やわずかなエアーの漏れる音が、単なる雑音ではなく「まだ減らせるムダがあるぞ」という設備からのサインに聞こえるようになった。
知識を得たことで、これまで見過ごしていた景色の中に、改善の種がいくつも隠れていることに気付けた。保全マンとして視野が、また一つ大きく広がったことを実感している。
この視野の広がりは、日々の予防保全に対する意識も大きく変えた。
具体的には、ロボットの定期的なグリスアップや作動油の更油といった作業だ。これまでは、故障させないことだけを目的としてきたが、今は違う。
点検時の異音やわずかな発熱にも敏感になった。エネルギーロスが抵抗として現れる前に手を打ち、常に設備がスムーズに動く状態を保つことこそが、「現場でできる省エネ」だと捉えるようになった。
ムダな動きを止め、手をかけて負荷を減らす。こうした日々の現場作業の積み重ねが、カーボンニュートラルへの確かな一歩だと、今の私は考えている。
設備保全係として6年目。ただ「直す」だけの保全から、地球環境にまで配慮した質の高い保全へ。目の前の設備とその先にある社会に責任を持ち、日々の業務に取り組んで行きたい。